

共通教育科目としてのPBL科目実践に関する省察～課題設定に着目して～

廣嶋道子*, 寺田貢**, 須長一幸***, 紺田広明****, 鈴木学***

要約

本稿では、共通教育科目（総合系列科目）として2017年度から開講した「現代を生きる」（地域・社会連携 PBL から学ぶ実社会で求められる主体性または体験型学習で学ぶ社会で求められる主体性）の実践を振り返り、共通教育科目におけるプロジェクト型学習（PBL：Project Based Learning）（以下、PBL という）についてその課題に着目して省察する。PBL のテーマは福岡市近郊の企業、組織から提供してもらっているが、課題の設定次第で学生のパフォーマンスが変わってくることが分かった。課題をどこに求め、その課題を実効あるものとするための学習環境をどうデザインするか、実践から今後の展望を拓く。

1. はじめに

2012 年中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」、2014 年中央教育審議会「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～（答申）」と、近年大学教育についても「従来のような知識伝達・注入を中心とした授業から、学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見いだしていくアクティブ・ラーニングに転換し、特に、少人数のチームワーク、集団討論、反転授業、実のある留学や単なる職場体験に終わらないインターンシップ等の学外の学習プログラムなどの教育方法を実践する。」とした質的転換を求められ、多くの大学で主体的かつ能動的な学びを提供すべく様々な教育プログラムが実践されている。

本学でも、教育開発支援機構が「福岡大学アクティブ・ラーニング型授業支援制度」（平成 29 年度～令和元年度）を設けるなど、アクティブ・ラーニングを広く推進している。

また、本学は「福岡大学地域連携ポリシー」を制定し、「地域の多様な主体と連携した課題解決型学習や地域をテーマにした授業等の導入を進め」、地域社会とつながりをもった教育を重要な柱とし、時代や社会の要請に応じた教育・研究・医療を推進することを大学の方針としている。

* 福岡大学エクステンションセンター講師

** 福岡大学理学部教授

*** 福岡大学教育開発支援機構准教授

**** 福岡大学教育開発支援機構講師

筆者らは、それらに呼応して、2017 年度から共通教育科目において、地域の多様な主体（学外の組織・地域住民等）と連携して実施するアクティブ・ラーニング型授業科目を開設した。本稿では、2020 年度前期までの共通教育科目「現代を生きる」の実践を振り返り、その実践内容を報告するとともに、実践で得られた知見をもとに共通教育科目としての PBL 科目について、課題設定に着目して省察する。

2. 本科目の概要

開設当初の 2017 年度は、産学協同で学生の主体性を引き出す体験型の学習プログラムを全国の大学で展開している一般社団法人「Future Skills Project 研究会」からノウハウの提供を受け実施した。2018 年度以降は、この実践結果から得られた知見をもとに独自の PBL を実施している。この科目のサブタイトルは 2018 年度前期：産学連携 PBL で学ぶ社会で求められる主体性、同後期：体験型学習で学ぶ社会で求められる主体性、2019 年度前・後期：地域連携科目：地域・社会連携 PBL から学ぶ実社会で求められる主体性としている。ここでは、主に 2018 年度以降の実践について述べる。

2.1 この科目のねらいと到達目標

この科目のねらいは、PBL を通じて、「正解のない課題」を解決しようとするプロセスと失敗を経験することから、社会で必要な力と現時点での自分との力とのギャップを自覚し、大学で学ぶ意義を再確認すること、自ら学ぶことの重要性を認識し、今後の大学生活を送る目的を明確にすることである。

到達目標（学習成果）を（ア）社会に触れ、社会の実際の特徴や課題が何か説明できる（知識・理解）、（イ）社会の課題を解決するうえで必要な力を知り、それらを実際に活用することができる（技能）、（ウ）大学生活を送るうえで必要な取り組みについて説明できる（態度・志向性）、とする。

2.2 対象者と定員

この科目は全学部学科 1,2 年次生（2017 年度、2018 年度前期は 1 年次生のみ）を対象とし、定員は上限 48 人である。

2.3 実施方法

この科目は従来型の講義形式ではなく、PBL を通して、自分で考え自分で行動するという「主体性」を自覚しながら、社会人としての活動を実体験するということをコンセプトに、以下のような方法で実施した。実社会に根ざした問題群を解決するために学生が複数人でチームを構成し共同で探求するしくみ（美馬他、2018）として、学外（福岡市近郊の企業、組織）の協力者（以下、学外課題提供者という）から実際の業務・活動に関係する課題（以

下、学外課題という）を提供してもらい、その学外課題提供者からフィードバック、評価してもらうことがこの科目のポイントでもある。実施年度によって課題の数やそれに伴う実施方法が若干異なることがあるため、ここでは 2019 年度前期実施分の実施方法を記す。

- ・ 5～7 人程度の学生をメンバーとしたグループを編成する。
- ・ 科目担当者が提示する学内の課題「福岡大学の魅力づくり：福岡大学が学生にとってよりよい教育、理想の学びの環境となるためには」（以下、学内課題という）に取り組む。
- ・ 学外課題提供者から学外課題を提供してもらい、その課題に取り組む。
- ・ 提示された課題（学内課題・学外課題）に対する解決・改善策をグループの活動を通じて作成する。
- ・ 学内課題に関連する部署の方々（以下、学内協力者という）、学外課題提供者に各グループで作成した解決・改善策のプレゼンテーション（5 分間）をそれぞれに対して行う。
- ・ 学内協力者、学外課題提供者によるフィードバック・評価をそれぞれから受ける。
- ・ 学内課題・学外課題に対する解決・改善策のプレゼンテーション後に各グループで振り返りを行う。

2.4 年度・期ごとの課題等一覧

この科目で学生が取り組んだ課題は表 1 のとおりである。年度・期により取り組む課題とその数は異なる。2018 年度前期までは学外課題 2 題、2018 年度後期は学内課題 1 題、2019 年度は学内課題と学外課題各 1 題ずつである。2020 年度前期は緊急事態下で大学構内への入構が制限されたため、学内課題の取り扱いは断念し、本科目担当者が課題を提供した。表 1 には、年度・期における履修者数、課題提供者、課題と課題提示からプレゼンテーションまでに配分した授業回数を示す。

表 1

課題提供者および課題

実施年度・期		履修者数	課題提供者	課題	回数
2017	前期	44	(独)都市再生機構	室住団地のコミュニティ活性化、団地の活力向上等に結びつく具体的なプラン	5
			(株)ミドリ印刷	AR のような、紙とのクロスメディアが行える、新たなサービスの企画・立案	5
2018	前期	23	(独)都市再生機構	災害時に強いコミュニティづくり	5
			(一社)福岡中小企業経営者協会	福大生と地場企業の両者にとって有意義な「出会い・学びの場」を企画せよ！	5
	後期	47	本科目担当者	福岡大学の魅力づくり：福岡大学が学生に	9

				とってよりよい教育、理想の学びの環境となるためには	
2019	前期	48	本科目担当者	福岡大学の魅力づくり：福岡大学が学生にとってよりよい教育、理想の学びの環境となるためには	9
			(独)都市再生機構	人口減少・高齢化・独居化が急速に進んでいく福岡市において現在生じている課題、今後発生が予想される課題を解決・予防するために、大学は具体的にどのような取組・活動ができるか	4
	後期	39	本科目担当者	(福岡大学新入職員として)地域の多様な主体と連携した課題解決型学習や地域をテーマとした授業を企画すること	8
			(一社)福岡中小企業経営者協会	他大学の学生、地域企業との交流をベースとした学びの施策	5
2020	前期	49	本科目担当者	災害時や感染症蔓延時などの非常時(非常事態)であっても持続可能な学び方・働き方の企画、提案	9

2.5 授業の構成、授業計画とその特徴

前節で示した通り 2018 年度後期は学内課題のみに取り組み、2019 年度前・後期は、学内課題を前半に、その後学外課題に取り組む二段構えの授業構成になっている。この構成に変更した理由については後述する。表 2 で学内課題のみに取り組んだ 2018 年度後期と学内課題と学外課題の 2 つに取り組んだ 2019 年度前期の授業計画を示す。

この科目は学生がステップを踏んで学び、実践できるように構成している。2019 年度では、初めにグループワークのしかた、ヒアリング調査の方法やプレゼンテーションのしかたなどグループで活動するベースづくりを行う。次に、学内課題に取り組むことで初めに学んだことを実践に移す。最後に、学内課題で実践したことを振り返り、その反省をもとに学外課題に取り組む。授業計画の中には、学内課題に関してはその課題に関連する業務を行う学内関連部署へのヒアリング調査を行うことを組み入れた。加えて、科目担当者がビデオ撮影した各グループの学内課題プレゼンテーションの練習風景を学生に視聴させ、自分たちのプレゼンテーションを客観的視点で振り返りをする回も組み入れている。さらに、授業を進める際の科目担当者である筆者らの関わり方についても科目のねらいから逸脱しないように注意を払った。PBL 導入に先行している同志社大学 PBL 推進支援センター『PBL 導入の

ための手引き』においても「学生が主体的に問題意識を高める過程を経ることなく、科目担当者側の問題意識を一方的に学生に刷り込み、科目担当者の意のままに学生に活動させようとしてしまう（場合がある）」との指摘がある。筆者ら科目担当者は学生が主体的に課題に取り組み、自ら考え行動するよう授業を進行するとともに、グループ活動に対する介入は最低限とした。

表 2

授業計画

回	2018 年度後期	2019 年度前期
1	オリエンテーション・アイスブレイク・自己紹介ミニプレゼンテーションを行う。	オリエンテーション・アイスブレイク・自己紹介ミニプレゼンテーションを行う。
2	グループワークの方法、目標設定の重要性/役割分担の意義、話の聞き方・質問のしかたについて理解する。	グループワークの方法、目標設定の重要性/役割分担の意義、話の聞き方・質問のしかたについて理解する。
3	プレゼンテーションのしかた・メモの取り方について理解する。グループ内でプレゼンテーション「私のおススメの食べ物」を実践する。	プレゼンテーションのしかたについて理解する。グループ内でプレゼンテーション「なぜ、大学で自分の専攻を学ぼうと思ったか」を実践する。 学内課題を個人で考え、課題解決のための企画提案書を作成する。 提示された学外課題とその取扱い方を理解する。
4	学内課題を個人で考え、課題解決のための企画提案書を作成する。	各人で考えた学内課題に対する解決・改善策をグループ内で発表し互いに質疑応答する。
5	各人で考えた学内課題に対する解決・改善策をグループ内で発表し互いに質疑応答する。企画提案書をブラッシュアップする。	各人でブラッシュアップした学内課題の解決・改善策を科目担当者に発表し、問題点、改善点の指摘を受ける。
6	各人でブラッシュアップした学内課題の解決・改善策を科目担当者に発表し、問題点、改善点の指摘を受ける。	グループを再編し、再編したグループで今後の進め方等を話し合う。 ヒアリング調査の方法、調査依頼方法について理解する。

7	グループを再編し、新グループで決めた学内課題についての方針を検討する。 ヒアリング調査の方法、調査依頼方法について理解する。学内関連部署へのヒアリング調査の手順を決める。	2018 年度後期に発表されたプレゼンテーションを優秀な事例として発表する。 学内関連部署へのヒアリング方針を話し合う。
8	プレゼンテーションの準備などグループ活動を行う。 授業外でヒアリング調査を行う。	学内課題に対するプレゼンテーションの準備などグループ活動を行う。 授業外でヒアリング調査を行う。
9	プレゼンテーションの練習を行い、練習風景をビデオ撮影する。	プレゼンテーションの練習を行い、練習風景をビデオ撮影する。ビデオ映像を見て改善点等を確認し、プレゼンテーション資料を修正する。
10	ビデオ映像でプレゼンテーションの振り返りを行い、改善点等を確認し、プレゼンテーション資料を修正する。	学内課題の最終発表会の準備などグループ活動を行う。
11	最終発表会に向けてプレゼンテーションの準備などグループ活動を行う。	学内協力者に対し、学内課題に対する課題解決・改善策を提案する最終提案発表会を行う。
12	学内協力者に対し学内課題に対する課題解決・改善策を提案する最終提案発表会を行う。	各人で考えた学外課題に対する企画提案書をもとにグループを再編し、再編したグループで取り組む学外課題のテーマを決める。
13	最終発表会で優秀なプレゼンテーションを行ったグループ(上位3チーム)による全体発表会を行う。 最終発表会の振り返りシートを作成する。	学外課題の解決・改善策を発表するためのアウトライン(紙ベース)を作成し、科目担当者のチェックを受ける。
14	各回の活動の振り返りを行う。	学外課題の最終発表会に向けてプレゼンテーションの準備などグループ活動を行う。
15	全体を振り返り、事後アンケート・レポート作成等を通じて、今後の大学での学びについて考察する。	学外課題提供者に対し学外課題に対する課題解決・改善策を提案する最終提案発表会を行う。

2.6 評価方法

この科目の成績評価は定期試験を行わず次にあげる評価項目で行った。年度・期により取り組む課題数が異なるため、下記の 3,4,5,6 の項目の有無、評価割合が年度・期により変わるが、他の評価項目に変わりはない。ここでは学内課題と学外課題各 1 題ずつ取り組んだ 2019 年度前期の評価項目と配点を示す。

- 1.リアクションシート(2%×15)に各回の開始時にその日の学習目標を「ミッション」として設定させ、目標を持って授業に臨めるようにする。授業終了時に「ミッション」に対する「振り返り」を記入することでその日の目標を達成できたのか、何を学んだのか認識させる。
- 2.事前アンケート・事後アンケート(5%×2)：社会人基礎力（経済産業省）の各能力要素から作成した事前・事後アンケートを使用。アンケートと称しているが、講義の初回および最終回に実施する複数項目のチェックポイントからなる学習成果の自己評価とし、これを記入・提出することで、2.1 この科目のねらいと到達目標で示した（ア）、（イ）、（ウ）に関する学生の達成度を評価する。
- 3.学内課題「福岡大学の魅力づくり：福岡大学が学生にとってよりよい教育、理想の学びの環境となるためには」に関し、企画提案書の提出(5%)、学内課題に関連する部署へのヒアリング(5%)、学内協力者へのプレゼンテーション(5%)の実施状況で評価する。
- 4.学内協力者によるプレゼンテーションの評価結果(10%)：学内協力者がプレゼンテーションに対する評価として、提案内容に関すること（課題の設定の適切さ、解決策としての適切さ、根拠の提示など）、プレゼンテーションに関すること（表現の適切さ、チームとしての活動、熱意など）の観点で評価する。科目担当者も同じシートを使って同時に評価を行う。
- 5.学外課題に関し、企画提案書の提出(5%)、プレゼンテーションのポスター作成(5%)、プレゼンテーション(10%)の実施状況で評価する。
- 6.学外課題提供者によるプレゼンテーション評価結果(10%)：学外課題提供者がプレゼンテーションに対する評価として、提案内容に関すること（課題の設定の適切さ、解決策としての適切さ、根拠の提示など）、プレゼンテーションに関すること（表現の適切さ、チームとしての活動、熱意など）の観点で評価する。科目担当者も同じシートを使って同時に評価を行う。
- 7.「今後の大学での学びについて」と題するレポート（1200 字程度）の提出（5%）：この科目を通して、社会を知り、社会で必要とされる力を知った結果、今後の大学でどのように学ぶかについて、レポートを作成・提出する。レポートの内容に基づき 2.1 この科目のねらいと到達目標で示した（ウ）について評価する。

2.7 学生が発表した解決・改善策とその評価結果

2018 年度後期の学内課題、2019 年度前期の学内課題・学外課題に対し学生が解決・改善

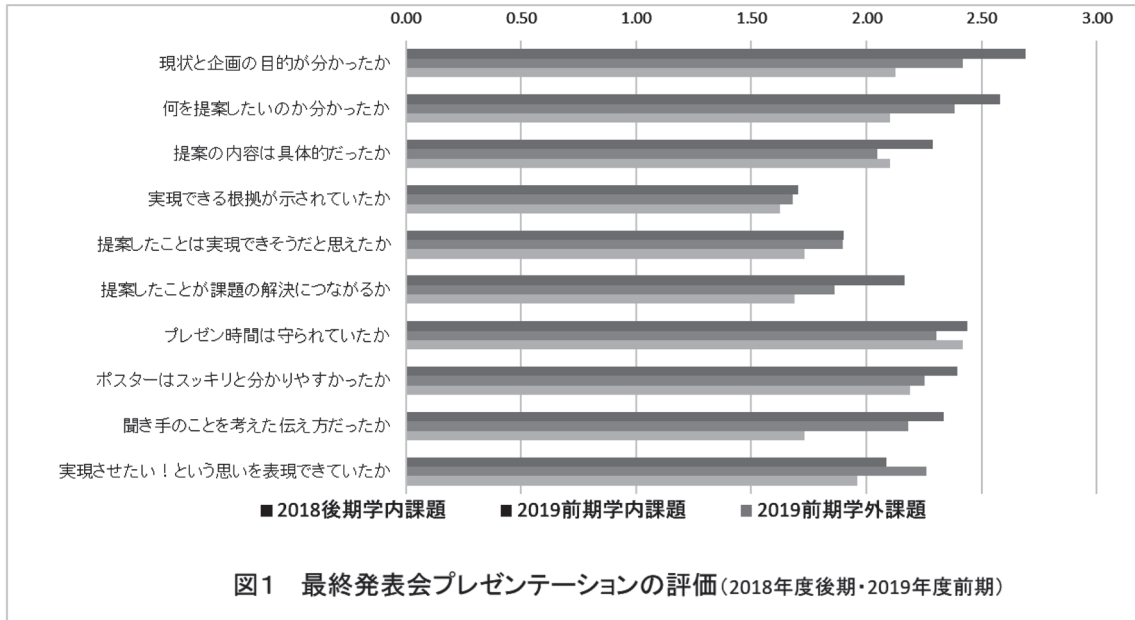
策として発表したタイトル名を表3で、それに対する学内協力者、学外課題提供者と科目担当者による評価結果を図1で示す。評価は提案内容に関すること（課題の設定の適切さ、解決策としての適切さ、根拠の提示など）6項目、プレゼンテーションに関すること（表現の適切さ、チームとしての活動、熱意など）4項目を1項目3点満点で行った。図1はそれぞれの課題を発表したグループ（2018年度後期学内課題8グループ、2019年度後期学内課題9グループ、学外課題8グループ）の項目ごとの平均を示している。

表3

学生が発表した解決・改善策

2018 年度後期	2019 年度前期
【学内課題】福岡大学の魅力づくり：福岡大学が学生にとってよりよい教育、理想の学びの環境となるためには	
【解決・改善策】 <ul style="list-style-type: none"> ・ゲームセンター前道路の改修 ・快適な食堂ライフを目指して ・学内移動 ・授業についていきたいけどついていけない ・二記念！劇的ビフォーアフター ・FU ポータルレボリューション～アプリ化への道～ ・時代錯誤～FU ポータルはもう古い ・福岡大学ランチミーティング 	【解決・改善策】 <ul style="list-style-type: none"> ・国際化を目指そう！ ・見学会をより面白くしよう！ ・情報集約プロジェクト ・学部内で広まる輪 ・福のわ ・あなたのそばに券売機 ・福大 No Smoking！ ・福岡大学 A 棟革命 ・君はもう迷わない
	【学外課題】 人口減少・高齢化・独居化が急速に進んでいく福岡市において現在生じている課題、今後発生が予想される課題を解決・予防するために、大学は具体的にどのような取組・活動ができるか
	【解決・改善策】 <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の運転事故防止 ・福岡市高齢者の事故率削減方法 ・ハピイベ～高齢者、地域と福岡大学の連携による住みやすい地域づくり～ ・団地で DAN！RAN！ ・SAP ～Senior Active Program～ ・子どもの見守り隊

	<ul style="list-style-type: none"> ・卓球ふれあい大会 ・ため池プロジェクト
--	---



3. 学生はこの科目で何を学んだのか

この科目を履修した学生は何を学んだと言えるのか。2.6 評価方法では科目としての評価方法を示したが、そのうち社会人基礎力をもとにした事前・事後アンケートで学習成果の自己評価を行うこと、科目終了時に提出する最終レポートとで学生が学んだことを外化させた。ここでは最終レポートの記述から学生が何を学んだのかを取り上げる。最終レポートは、2.6 評価方法にあるとおり「今後の大学での学びについて」と題するレポート（1200字程度）で、①この科目を履修した動機と目的、②与えられた課題について企画し、プレゼンすることを通して自分が得たこと・学んだこと、③今後、自分は大学でどのようなミッションをもって学ぶか、の3点を盛り込むこととしている。以下、最終レポートの記述から学生自身は何を学んだと認識しているのか、記述を分類して取り上げる。

1. グループで（他者と）活動したことで学んだこと

- ・一人だけの考えではまだ足りていない部分も、人が集まればその分多くの意見や考え、知識が出てくる（2018年度前期、経済学部1年生）
- ・自分の意見を発言し、お互いの意見を指摘しあって、高めあっていけた（2018年度前期、人文学部1年生）
- ・相手や仲間の意見も尊重することの大切さ（2018年度後期、経済学部1年生）
- ・個々の意思を一つにすることは困難（2018年度後期、理学部1年生）
- ・目標設定（2018年度後期、経済学部1年生）

- ・役割はとても大切（中略）役割を決めることが難しかった（2018 年度前期、経済学部 1 年生）
- ・その人その人に向いた仕事を振り分け、皆で協働する（体験）（2018 年度前期、経済学部 1 年生）
- ・自分の意見を相手に伝える難しさ（2018 年度後期、人文学部 1 年生）
- ・自分とは全く違ったり、思いもよらなかったような意見や視点をグループワークで知った（2019 年度前期、人文学部 1 年生）
- ・チームで行動することの難しさ（2018 年度後期、商学部 2 年生）

2. 発表（プレゼンテーション）の準備、実施して学んだこと

- ・下準備の大切さ（2018 年度後期、商学部 2 年生）
- ・発表の上手な人の～良いところは自分のものにして（いきたい）（2018 年度後期、人文学部 1 年生）

3. 課題に取り組んで学んだこと

- ・今まで考えたことがない社会のことを考え（た）（2017 年度前期経済学部 1 年生）
- ・自分たちの中ではよくできたと思えるような内容でも、企業の方からのプレゼン後の質問や改善点を聞くと考えの浅さや不足点が驚くように気付かされた（2018 年度前期、経済学部 1 年生）
- ・自分の意見は面白さがあるだけで具体性にはすごく欠けている（2018 年度後期、工学部 1 年生）
- ・企画を提案する難しさを実感（中略）具体的かつ根拠のある解決策を提案することに苦労した（2019 年度前期、商学部 2 年生）
- ・（ヒアリング調査して）いろいろな人の意見を聞くことの大切さ（2018 年度後期、商学部 1 年生）
- ・自分では気づかない間違いと違う視点から教えてくれる人がいて～多くのことを学べた（2019 年度前期、商学部 2 年生）

以上の記述からみると、学生たちはグループワークを通じて他者との差異を認識したこと、他者の意見を尊重することの大切さ、プレゼンテーションを通じて準備の大切さ、他人に自分の意見を伝える難しさ、ヒアリングなどを通じて社会人との接点をもつことから、考えの甘さ、詰めの甘さを実感したこと、などこの科目がねらう「社会で必要な力と現時点での自分との力とのギャップ」について体感することができたと言える。協調学習の場として学生に多くの学びが生起した半面、中には、グループで活動することでメンバーの責任が曖昧になるなど、グループ自体の活動がうまくいかなかった場面も散見されている。

4. 省察：「課題」は適切だったのか、授業実践を振り返って

学生たちがどのようなことを学んだのかについては前節で示した。一方で、2018 年度前

期までの実践を振り返ると、学生たちの課題への取り組み方や課題への理解や考察を深めるという点ではあまり納得のいくものではなかった。授業時間中の取り組み方を見ると「課題に対する解決・改善策の提案内容はどうあれ、プレゼンすればよいのではないか、グループ活動に参加している姿を見せればいいのではないか」と思って授業に臨む学生がいることも事実である。学生の中には、「自分たちの中ではよくできたと思える内容でも～考えの浅さや不足点に気づかされた(が)(中略)二つのプレゼンを終えて自信と達成感(を得た)」(2018 年前期、経済学部 1 年生)、「企業の方からの指摘が多く困ったこともあったが、(略)乗り越えられた」(2018 年度前期、人文学部 1 年生)と記述する者もいる。学内・学外課題に対する解決・改善策の評価、出来不出来はどうあれ、「社会人にいろいろ言われたけど、社会人じゃない自分たちはちゃんとやり遂げたんだ」という妙な達成感をもつ学生が多かった。各年度・期に協力いただいた学外課題提供者からは、最終的に学生が提示した学外課題に対する解決・改善策の質を問う意見や「本気で考えたのか」「真剣度が足りない」など厳しいフィードバックや評価をされており、科目担当者から見ても課題に対する考察を深められたとは到底言えないものであった。最終的に提示される学内課題・学外課題に対する解決・改善策の良否自体がこの科目のねらいではないにせよ、グループの中で問題意識をたかかわせることもなく、その場しのぎの思い付きを形にして終わりという取り組み方はこの科目のねらいでもある課題発見力、考え抜く力をつけることにはつながらない。

この科目で「正解がない課題」に取り組むこと、その取り組み方については、科目初回に「「正解がない」とは「ただ思い付いたことで良い」ということではなく、「十分な根拠があり、誰もが納得できるだけの説得力のある提案」である必要がある」と提示しているにもかかわらず、学生が発表する課題に対する解決・改善策は思い付きの域を出ず、問題点などの指摘を受けてもその指摘をもとにさらに調べる、考え抜くと言ったことができていない。2、5 でも述べたとおり、筆者ら科目担当者はグループ活動への介入は最小限にとどめたが、課題の解決・改善策の企画段階でレビューを行い、各グループの企画案の問題点や課題を指摘し改善を促していた。それでもなお、このような結果を目の当たりにすると、筆者ら科目担当者はこの科目のねらいを達成するための適切な課題の設定ができていないのではないかと考えざるを得なかった。協調学習としての学びだけを目的とするのであれば PBL とする必要はない。学生が主体的に取り組める課題を適切に設定することは重要なことである。

また、学外課題提供者から実際の業務・活動に関係する学外課題を提供してもらう際に、学外課題提供者の事業内容、課題の背景などについての説明はあるものの、授業回数や学外課題提供者への負担を考えて、学生が直接実際の職場を見学することや現場の人たちと交流するなどの学習環境は準備していなかった。このことも実社会や課題自体にリアリティを感じられないということにつながり、課題に対するアプローチや考察を深めることにならなかったのではないかと筆者ら科目担当者は考えた。

そこで、履修対象者である 1 年生がリアリティを感じ「自分事」化できる課題、現場にい

る社会人に容易にアクセスできる課題を設定することでその解決を図ることにした。2018年度後期は課題を本学に求め「福岡大学の魅力づくり：福岡大学が学生にとってよりよい教育、理想の学びの環境となるためには」を学内課題とし、学生自身が組織（大学）を構成する一員として取り組むこととした。そして、学内課題に関連する学内部署の職員の方々に直接アクセスしてヒアリング調査を行い、学生たち自身が考えた学内課題に対する解決・改善策に現場の方たちから意見やアドバイスをもらえるようにした。それに加えて、1年次生の社会経験不足を補い、より課題への理解や考察を深める一助となるように2年次生も履修対象者としてすることとした。

2018年度後期は学内課題のみに取り組み表2のような授業の構成、授業計画で臨んだ。その結果、完成度は高いとはいえないまでも、自分たちが福大生として実感していた問題点を学内課題のテーマに据え、その解決・改善策を提示することができた。企画途中自分たちがテーマとしたことに関連する部署にヒアリング調査に行くことを授業に組み込んだことで、学内協力者である現場の方々から、その考察が現場ではどのように捉えられるのか、学生が考える解決・改善策では何が足りないか、問題点は何かということについて指摘を受けることができた。そのことが学生にとって大きな刺激になり、その指摘をもとに改良した解決・改善策を表3に示す最終案にすることができた。また、ヒアリング調査に協力してもらった学内協力者の方々に対して、学内課題の解決・改善策を発表しフィードバックと評価を受けることも学生たちにとっては大きな学びとなった。

2018年度後期のこの実践から、筆者ら科目担当者は、2019年度の授業計画を検討する際に、学内課題を科目前半に取り入れ、「課題解決」に係るミニ成功体験ともいえる経験をしたうえで学外課題に取り組むことにすれば、課題への取り組み方、考察を改善し、よりよい学びにすることができるのではと考えた。そこで、2019年度前・後期「現代を生きる（地域連携科目：地域・社会連携 PBLから学ぶ実社会で求められる主体性）」は、学内課題で「課題解決」に係るトレーニングを積み、その経験を踏まえて学外課題に取り組む二段構えの授業構成に変更した。

その結果、2019年度前期は表2にあるように2つの課題としたこと、学内課題をミニ成功体験とするために学内課題に多くの授業回数を配分したことで、学外課題には授業終盤の4回分を充てることしかできなかった。その学外課題に対する解決・改善策の質と言えば学外課題提供者に「熱意が感じられない」と評価され、筆者ら科目担当者が学内課題に課題を変更する契機となった2018年度前期よりもさらに評価が下がるものとなった。図1で示した、最終発表会プレゼンテーションの評価結果を見ると2019年度前期の学外課題が一番低い評価になっており、特に企画の目的や明確さの項目が他に比べても低い評価である。2019年度前期の学外課題提供者からは、学外課題の解決・改善案になっていない、何を解決したいのか分からないという指摘もあった。確かに、すでにあるサービスや取り組みの域を出ず、それらをなぞるような提案が多かった。

2019 年度の結果からすると、学内課題で「課題解決」に係るトレーニングを積み、その経験を踏まえて学外課題に取り組む二段構えで 2 つの課題に取り組む授業構成にしたものの、学内課題での経験を学外課題に応用するという目論見はうまくいったとは言えない。学外課題については時間数の少なさもありその場しのぎのいい加減な提案と評価されてもしかたない内容であった。クオリティの低さもだが、課題に取り組むプロセスで何に気づき、学んだのか、何が足りなかったのか、という PBL で重要な振り返りの時間を十分とることができなかった。松下（2016）が指摘するように、「内化と外化を繰り返すなかで理解が深化する」学習サイクルをうまく具現化することができなかった。これは偏に科目担当者が地域連携科目としたことを意識し、学外課題提供者から実際の業務・活動に関係する学外課題を提供してもらうことに拘泥したことに起因する。そのために学内課題に取り組んだあとの振り返りを十分行わないまま学外課題に取り組むことになり、それが学生のパフォーマンスの低下を引き起こしたものと考えられる。

2020 年度前期は再度学習環境のデザインを含めた課題の設定について考えさせられることになった。2020 年度前期は緊急事態下で大学構内への入構が制限されたため、学内協力者へのヒアリング調査ができないこともあり学内課題の取り扱いは断念した。その代わりに、筆者ら科目担当者は直面するコロナ禍において考えられる課題として、「災害時や感染症蔓延時などの非常時（非常事態）であっても持続可能な学び方・働き方の企画、提案」を設定した。社会で大きな問題になっていることを課題とすることもリアリティを感じる一つの手であり、外出自粛の状況であってもインターネット経由で情報を広く得られるのではないかと考えたのである。学生たちからの企画提案書の中には「マッチングアプリによる大学での人間関係構築」という大学に登校できない状況下だからこその提案もあったが、インターネットにあふれる情報をまとめる作業自体を企画立案と錯覚している学生や解決・改善策として実現性のない提案をする学生もみられた。コロナ禍が社会的に大きな問題であるとは言え、学生にとっては、自分事としてリアリティを実感することが難しかった可能性がある。また、この科目の大事な要素でもある社会人との接点を持つことについては、この状況下でできること、学生の解決・改善策のプレゼンテーションを学外の協力してくださる社会人の方や学内事務部署の方にオンラインで視聴、評価をしてもらうことにとどまった。緊急事態下でできることが限られていたとはいえ、もっと工夫できることがあったのではと反省点が残った。

5. おわりに

本稿では、課題の設定に着目して、学内課題だけに取り組む授業実践と学内課題と学外課題に取り組む授業実践を取り上げ本科目のこれまでを振り返った。それにより、低学年次における PBL を実効性あるものとし、学生の成長を促すためには、学生がリアリティを感じ「自分事」化できる課題を設定すること、適切な課題数であること、加えて、課題の解決・

改善策を考える際に現場にいる社会人に容易にアクセスし、フィードバックを得られる学習環境を整えることが重要な要素になることを示した。このことは主に学内協力者、学外課題提供者の評価や学生のレポートの記述内容に基づいているため、学生をはじめとした科目に関係する方へのインタビュー調査などその内容を精査すること、学生がこの科目で学んだことをその後の学生生活にどう生かしているのか、追跡調査を行うなどさらに詳細な検証が必要である。これらについては今後の課題としたい。

PBL を通じて学生がよりよく学ぶために工夫すべきことはこのほかにもたくさんある。特に、アクティブ・ラーニングでもある PBL で重要なこと、この科目で学んだこと、経験したことを自分の言葉やパフォーマンスで外化し、それを客観的な視点で見直し再度内化すること、それを学生の日常に戻し、次の学習活動や学生生活での問題解決に応用できるような力をつけること、それらを十分できるように本科目の授業方法に工夫を重ねていくことが必要不可欠だと考えている。また、学外課題に取り組むのであれば、学内課題に取り組む際と同じような学習環境をどうすれば整えられるのか、学外課題提供者から理解と協力を得つつその方策を模索したい。

最後に、この科目は、学内の事務部署の方々、無償で本学の教育に協力してくださる地域の方々に支えられてきた。通常科目担当者の教員と履修者の学生の二者関係で進める授業に、この科目では第三者であるそれらの方々を迎えたことで、二者関係で進める以上に授業に緊張感が生まれ、学生には多くの学びや気づきがあった。この科目に関わってくださった学内の事務部署の方々、地域の方々には今後もこれまでと同様に協力してくださるようお願いするとともに、この場を借りて改めて謝意を表したい。

参考文献

経済産業政策局産業人材政策室. 社会人基礎力

<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>, (閲覧日:2020 年 9 月 17 日)

中央教育審議会(2012). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申) .

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf (閲覧日: 2020 年 9 月 11 日)

中央教育審議会(2014). 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～ (答申) .

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf (閲覧日:2020 年 9 月 11 日)

同志社大学 PBL 推進支援センター(2011). 自律的学習意欲を引き出す! PBL Guidebook PBL 導入のための手引き . <https://ppsc.doshisha.ac.jp/attach/page/PPSC-PAGE-JA->

[9/56858/file/pblguidebook_2011.pdf](#) (閲覧日:2020 年 9 月 11 日)

福岡大学授業シラバス(2018),現代を生きる (産学連携 PBL で学ぶ社会で求められる主体性) https://acsf.jsysneo.fukuoka-u.ac.jp/kyogaku/syllabus/syllabus/sy_disp.php

福岡大学授業シラバス(2018). 現代を生きる (体験型学習で学ぶ社会で求められる主体性) https://acsf.jsysneo.fukuoka-u.ac.jp/kyogaku/syllabus/syllabus/sy_disp.php

福岡大学授業シラバス(2019). 現代を生きる (地域連携科目:地域・社会連携 PBL から学ぶ実社会で求められる主体性)

https://acsf.jsysneo.fukuoka-u.ac.jp/kyogaku/syllabus/syllabus/sy_disp.php

福岡大学授業シラバス(2019). 現代を生きる (地域連携科目:地域・社会連携 PBL から学ぶ実社会で求められる主体性)

https://acsf.jsysneo.fukuoka-u.ac.jp/kyogaku/syllabus/syllabus/sy_disp.php

松下佳代編著(2015). ディープ・アクティブラーニング. 勁草書房. 6-10

溝上慎一, 成田秀夫編(2016). アクティブラーニングとしての PBL と探求的な学習. 東信堂. 10-16

美馬のゆり編著(2018). 未来を創る「プロジェクト学習」のデザイン. 公立はこだて未来大学出版会. 12-18